
幕末血風帳

杜 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末血風帳

【Nコード】

N4203A

【作者名】

杜 葵

【あらすじ】

幕末江戸を中心にしたコメディ短編集です。主に小島四郎、坂本龍馬、千葉佐那子、土方歳三が出張っています。

運命の始まり〜と書いて腐れ縁と読む

初めて君に触れた時、これは神様が僕に授けてくれた宝物だと思
った。

すごくすごく、大事にしなきゃいけないんだって。

君が笑ってくれたから、僕も許されていいんだって。

僕の指を握りしめた君の手に、今でも僕は捕まったままなんだ。

夢と現を間違えはしない。間違えようがないからだ。現の世界に
あの子はいないから。

目覚めた時、すぐに目に入っただのは、見慣れた自室の天井ではな
く、女の子の顔だった。女の子と言っても、恋人とかそういうのと
は違う。何故なら、てるはまだ九才になったばかりだ。僕に膝枕を
し、あと年が五つ上なら、慈悲深いと言えるような微笑みを浮かべ
ている。

「四郎様」

彼女は黒目の大きな瞳を柔らかく綻ばせ、無意味に僕の名前を呼
んできた。僕は畳の上に肘枕で眠ってたはずだから、彼女が僕の頭
を持ち上げて、自分の膝に乗せたことになる……自分で寝ぼけて
彼女の膝に抱きついたなんて考えたくない。

「抱っこ」

至極、単純に彼女は要求してきた。

「てるが抱っこしてあげてたから、次は四郎様の番よ」

「ああ、いいよ」

僕は彼女の膝から頭を起こし、その小さな体を抱き上げた。彼女は
僕の体の中に自分の定位置を見つけているらしく、抱き直さずと
も安定して僕の腕に収まる。

彼女がこうして必要以上に僕に甘えたがるのにも理由がある。彼女の父親はお役人。母親は既にならない。世話とか教育とか、そういった義務的なものから離れて、彼女を構う大人はいないと言っているだろう。

(りん……)

彼女の相手をしてる時、いつも思う。あの子には抱き締めてくれる腕があるのだろうか。いないことはないだろう。人の情というもの、理由もなく取り上げられる一方で、無条件に与えられるものでもある。

いつしか、てるは目をつぶっていた。寝たふりさえしてしまえば、本当に眠ってしまうまでは、僕が彼女を置いていかないことを彼女は知っている。

「誘拐？」

聞き慣れない物騒な単語。彼の顔を見れば、それが聞き違いなどではないことは分かる。

いつもの場所、いつもの顔ぶれ。北辰一刀流の千葉道場は今日も塾生で暑苦しい賑わいを見せている。

今は昼の休憩中。この時間に顔を出したのは、ここの塾頭の友に特に用事があったというわけでもなかった。たまたま道場の前を通りかかった時刻が昼だったに過ぎない。

「一昨日、橋の下で手首だけが見つかったちゅう話じゃ」

いつものバサバサ頭。いつものヨレヨレ袴。だが、今日の彼の表情にはいつもの明るさがない。

「その前はゴミ箱の中に足がまるまる一本、その前は寺の狛犬の頭の上に耳、同じ日に頭の皮が見つかったちよる」

「……」

先週、呉服屋の娘が行方不明になったのだという。五歳のその娘は縁日で、母親がちよっと目を離れたうちに、いなくなってしまうのだ。日を置いて、断片的に体の欠片だけが見つっている。母

親は発狂し、川に身を投げた。助け出されたが、未だに意識が戻っていない。

四郎は両手に持っていた茶がすっかり冷たくなっていることに気づき、側に置いたままになっている盆の上に戻した。からっと晴れた陽気にも関わらず、日溜まりの縁側の温かさが、ひどく湿って感じられた。

（探すだけ無駄だろうな）

四郎は言葉に出さず、ひとりごちた。

被害者の子供の安否は言うまでもない。そして、犯人。こういった猟奇的な行動を起こす者ほど、平穏な表情を保ち、普通の何でもない人々に溶け込むのが巧い。そして、それを見分けるのは不可能に近いのだ……彼らと同種の人間でない限りは。

この事件のように、人混み雑多な縁日での連れ去りとなれば、目撃者を確保できなければ、犯人はまず捕まらない。一週間経って、犯人が挙がらないということは、つまりはそういうことなのだ。

「道場の若いもんも見廻りに駆り出されるぜよ。ま、半分以上が立候補じゃが」

自慢気に言う彼も、自分とそう年は変わらないはずだった。十五歳と十九歳。あと十年も経てば年の差という差はどうでもいいものになるだろう。

「あんたも参加するのか？ 龍馬」

「実はおまんを誘おうと思っちよったところじゃ」

彼、龍馬は掻き込むように四郎の肩に腕を回してきた。だらりとはだけた衿は鍛錬直後だからだけというわけではない。少なくとも、四郎は龍馬の袴に折り目がついているのを見たことはなかった。

（断れば悪人だよな）

やるべきことさえやってしまえば、そのきっかけがどれほど悲惨な出来事であったとしても忘れてしまうのが若者という人種である。四郎は曖昧に頷いた。

どたどたと、慌ただしい足音が近づいてきた。

「龍馬ー！」

寝起きにはあまり聞きたくない甲高い少女の声が龍馬の肩に噛みついた。

「わたしを仲間はずれにするのって、どういうことよ?!」

現れたのは、十六歳ほどの少女だった。色白で小柄な体軀に短めの紫の袴がよく似合っている。白の元結いで結い上げた長い黒髪、小顔にきりっとした奥二重の目。美少年という形容がぴったりだが、彼女はこの千葉道場の娘、佐那子だ。

「遊びに行くんじゃないぜよ」

「分かってるわよ!」

佐那子は四郎と龍馬の間に割り込むように（正確には四郎を押しのけるように）腰を降ろした。

「あんなひどいことする奴は、生まれてきたことを後悔するような目に遭うべきだわ。わたし、間違ったこと言ってるかしら」

「指摘しづらいが、あまり大声で言わん方がええぜや」

「そうよね。犯人に聞かれたら元も子もないもんね」

「……」

龍馬はこめかみを押さえた。

「連れてってあげれば?」

事も無げに言ったのは四郎だった。佐那子が間にいる為、龍馬がどんな顔をしてるかは見えないが、想像はつく。その上で、更に続けた。

「女子だってことを考えなければ、戦力になることは否定しないだろ? それに、彼女を加えることで、また見廻りに参加する人が増えるかも」

これが本格的な捕縛作戦なら、彼女を囚にするというのも考えられるのだが、四郎はそれは言わないでおいた。別に彼女でなくとも、自分が女装すればいい話だ。今の素の佐那子よりは綺麗に『作れる。』口が裂けても言えないが。

龍馬が力なく項垂れた。手元にどんな手札を持ってようが、関

係ない。佐那子の気まぐれから本気まで、付き合うしかないのが、彼と彼女の関係だ。

夜な夜なの見廻りの効果はとも言えるし、無駄だとも言えた。下手人は捕まっていない。ただ、新たな犠牲者の話は聞こえてこない。下手人の捕縛という意味でならさっぱりだが、凶行の予防という点では大きな効果を挙げていると言える。

「奥義・バク転だるま転がし！！」

意味不明の必殺技の名を叫びながら、佐那子が木刀を尋常じゃない速さで振り回しながら突進してくるのを、四郎はどうということもなく眺めていた。

やはり、運動神経はずば抜けて優れている。それが大流儀、北辰一刀流の千葉家の血統によるものなのか、本人の努力によるものなのか、あるいはその両方なのかは分からない。が、どうでもいいことである。彼女は剣の天才。その事実が動かない。

扇型の残像を描いて振り下ろされてくる木刀。四郎は僅かに体をずらただけで、完全にその軌道から逸れる。佐那子の顔が歪むのが見えた。次に来る衝撃を予想してのことだろう。かわいそうだと思うないでもなかったが、四郎はいつもの通り、彼女の脇に回り、軽く肩を押した。触れる程度に。

「きゃああああああああ！！」

それだけで、彼女の体はバランスを崩し、派手に転倒する。四郎が唇を動かす前に、彼女は木刀を杖のようにつき、腰を上げた。だが、打ち所が悪かったのか、完全に立ち上がれないでいる。

「まだよ。まだ、負けてないわ」

頬を紅潮させ、こちらを睨めあげる彼女の汗ばんだ首筋に当てたのは、木刀ではなく、人差し指と中指の二本の指。

「納得したかい？」

空いた手で木刀を肩に担いだ格好のまま、四郎が言うと、佐那子は何を言い返すわけでもなく、ぺたんと尻を床についた。ただ、そ

の貫くような視線だけは対峙した最初からずっと四郎に突きつけたまま、今も変わらない。

「ズルいわよ」

拗ねた顔で、彼女は小さく呟いた。そう言いたくなるのも分からなくはない。

「悪くないよ。あと一年もしないうちに、僕も木刀を使わないといけなくなるな」

「その嫌味な喋り方、何とかならないの？」

彼の何かどれにでもケチをつけてやらないと気が済まないとはかに、佐那子はぶつくりと呟いた。

「とにかく、約束は約束だよ。君は今夜から大人しく家にいること」「うるさいわよ。何よ。分かったのよ、本当は！ 僕から一本取れるなら、龍馬も心配することないだろうけど、なんて！ いつもの口車じゃない」

「その口車に乗ったのは君だ。それに、龍馬が君の身を心配してるのは本当だよ」

「嫌い！ もう、あっち行ってよ！」

佐那子は草でもむしるように床の上で拳を握り、四郎の背中に本当にならざる草でも投げつけるような仕草をした。

（龍馬の奴も、このくらいことが考えつかないことはないんだろうけどね）

龍馬も刀を取らせれば、四郎と互角以上に渡りあう。塾頭の肩書きは伊達でも最上でもない。だが、彼の気持ちに分からないわけではない。大切な宝物を扱う時、人は誰でも臆病になり過ぎる。震える指で触れて、取り落として、壊す。あるいは、触れることすら出来ずに、朽ちさせる。そして、誰もそれに気づかない。

（分かるよ。すぐ分かるんだけどね……）

千葉道場を出た四郎の足は、ごく自然に鄙びた街並みへ向かっていった。牛込の烏道場……試衛館へ。

中へ入るわけでもない。ただ、通り過ぎるだけ。あの子が掃き

清め、水をまいたかもしれない道場の前を。もしかして、おつかいか何かでここから飛び出してくるようなことを期待していないと言えは嘘だろう。だけど、それが馬鹿げた妄想だと認識できる理性はいつだって残っている。

「行つてまいります。若先生」

快活な童の声が門の奥から聞こえてきた。

四郎は道の角へ身を隠した。そうしなければいけない理由は思いつかない。しかし、あのまま往来であの子とすれ違うことは出来そうにもなかった。

門の奥から出てきたのは十歳くらいの少年に見える。紫色の風呂敷包みを抱える両手も、短い着物の裾から除く足もカリカリに痩せていたが、不健康というよりは、年齢に不相応に引き締まった印象がある。それは的是はずれでもないかもしれない。『少年』は、ここしばらくの間に、試衛館の正式な弟子として迎え入れられたという話だから。

欲目でなく自分に似てると思う。並んで歩けば、誰もが兄弟だと見るだろう。その想像は楽しかった。

ふらふらと少年の後をつけるような感じで歩きながら、一丁目で四郎は自分がとんでもなく馬鹿げたことをしているという自覚に負けた。このまま視界にあの子を入れていても、抱き締めることはおろか、話しかけることもできない。ああ、もしかして、あの子が抱えている風呂敷が解けて、落とし物でもしてくれることでも期待していたのか？ だとしたら、お前はどのようなでもない大バカ者だ。小島四郎……父上の教えをもう忘れたのか。

落胆と安堵が重なって、じつとりと重くなった足取りで、四郎は元来た道を引き返した。しばらく、来るのはよそう。沖田さんはしっかりと約束は守ってくれているし、今のところは約束が破られることも、秘密が漏れる危険もなさそうだ。

ザリ……と、下駄の歯が砂を噛む音がした。背後から。どうということもない。しかし、振り向いたのは正解だった。

視界いっぱい広がった影が人間の拳だということを認識したのは、視覚よりも直感だった。四郎は腰を屈め、地面に手をつくとき、そこを重心にして、足払いをかけた。

「ちいっ！」

だが、敵もなかなかやる。垂直跳びで四郎の足をかわし、そのまま真上から足を振り下ろしてきた。

（闘い慣れしてる！？）

動きは雑だが、無駄はない。専門の訓練を受けた、というよりは、喧嘩の場数を踏んでいるという感じだ。どちらが厄介かは場合にもよるが、後者の方は次の動きが読みにくい為、前者である四郎はやりづらい。

四郎は迷わず地面についていた手を握った。そして、男の顔面に叩きつけるように開く。

「ぶわっ！」

突然、砂をぶちまけられた男は目を押さえて、動きを止めた。その隙に、四郎は腰を上げ、逃げ出した。

（間違いない。あいつだ）

特徴は覚えた。年齢は二十歳ほど。背は高い。色白で二重の切れ長の目。鼻筋は通って、顎は細い。要するに文句のつけどころのない美男子だということだ。

四郎は自分の閃きを疑わなかった。往来で無抵抗の子供にいきなり殴りかかってくるような奴がそう何人もいてくればたまらないではないか。

（間違いない、あいつだ）

歳三は慎重に目に入った砂を取り除きながら、確信した。

特徴は覚えた。年齢は十五、六ほど。小柄だが、何かしらの戦闘訓練を受けている。どこかしら宗次郎に似た印象を受けたのは、中性的な面差しのせいだろう。

疑いの余地はない。塀の陰に隠れて、宗次郎の後をつけていた。

途中で尾行を止めたのは、俺に気づいたからだろう。

試衛館にて。

「怪しい奴を見ただと？」

勇は訝しんだ。太い顎を撫でながら、今耳から入った情報を噛み砕いてるようだ。

「しかし、トシよ」

最初から信じてもらえるとは思っちゃいない。

「宗次郎をつけてたってか？ 人並みの愛情を持った人間が、可愛い子供を可愛いと思うことまで怪しんでは可哀想ってもんだ」

こういう奴なんだ。もつとも、歳三は勇のこの鷹揚さが好きだが。

「真面目に聞いてくれ」

一刻を争う。奴は自分の顔を覚えられて、焦ってるはずなのだ。

自分があの時あの場所にいなかったら、どうなっていたか。宗次郎は確かに剣才がある。だが、子供は子供だ。

「調べはついてる」

宗次郎を守ってやれるのは自分しかない。

「名前は小島四郎。赤坂の金貸しの倅だ。そこらの若君より高等な英才教育を受けてるらしいが、要するに、学がある奴はロクでもねえってことだ」

「で、どうするんだ？」

「一人の時を狙って消す」

「……」

ジト目になる勇は既に眼中になく、歳三は策を練りだした。

（門下でもないのに千葉道場に入入りしてる。その娘といい仲とか？ ふむ……）

そして、全く同時刻の小千葉。

「怪しい奴を見ただと？」

重太郎は訝しんだ。太い眉を上げながら、今耳から入った情報を

検分しているようだ。

「しかし、四郎ちゃんよ」

最初から信じてもらえるとは思っちゃいない。

「いきなり襲われたってか？ お前は自分で思ってるより可愛いんだ。佐那子がいなけりゃ、小千葉のアイドルはお前だったって、龍さんも認めてるよ」

こういう人なんだ。もっとも、四郎は重太郎のこの口の軽さが嫌いではない。

「茶化さないでください」

一刻を争う。奴は自分の顔を覚えられて、焦ってるはずなのだ。

もし、あの子をつけるなどという気まぐれを起こさなかったら、何が起きていたか分からない。

「調べはついてます」

妹を……りんを守ってやれるのは自分しかない。

「名前は土方歳三。石田村の豪農の出です。定職はなくて、家業の菓の行商をたまにしている程度……いい年して、ブラブラしてる大人の辿り着く末路の一つってことですよ」

「で、どうするつもりなんだ」

「一人の時を狙って消す」

「……」

半眼になる重太郎から意識的に目を逸らし、四郎は策を練りだした。

（相当な女好きだっていうな。気は進まないけど、使えるものは使うべきだ）

見廻りが無駄だとまでは言えないが、無意味だとは言えそうだ。

男は新しく手に入れた、「恋人」の頬に頬を寄せた。こんなに可愛がっているのに、何一つ応えてくれない。それがもどかしくもあり、愛おしくもある。確かに彼女は何かを感じているはずなのだ。魂は肉体が朽ちても不変のものだと、男は信じている。

格子窓の外、濃紺の夜闇に篝火がチラチラと見える。見廻りどもの火だろう。

何をそうムキになるのか分からない。今、自分が「恋人」と戯れていることが、人形の首をもいで遊ぶ子供とどう違うものか。人間の体は死ねばただの物体に過ぎない。人形と同じだ。ただ、人形の腹から出るのが綿で、死体からは血と内臓だという、その小さな違いがあるに過ぎない。

そうだ。そんなに大騒ぎするようなことではない。

（次は男の子がいい。今日、来た試衛館のチビ……）

可愛い子だった。あんまり可愛かったから、酒を少しまけてやった。礼儀正しく、礼を言っていた。また、来るだろう。あんなに優しくしてあげたんだから。

この格好が使えるのも、今年限りだろう。いや、今年限りでありますように。

四郎は祈りながら、鏡の中、唇に紅をさす美少女を見ていた。

（よし、完璧）

あの土方歳三がどれだけ遊び倒してようが、この娘に引っかからないようなら、女好きの称号は取り上げるべきだ。

朱色の縦縞の着物、佐那子から借りたものである。ついでにここも佐那子の部屋だ。潔癖で龍馬以外の男には冷淡な彼女だが、何故か四郎には気を許して、普通に部屋に上げてくれる。本家へ泊まりがけで出かけた今朝ですら、あっさり着物を貸してくれ、化粧道具まで用意してくれた。もしかして、この辺が彼女が四郎を受け入れてくれる理由なのかもしれない。

四郎は道場の外に出た。昼日中、人通りは普段と同じ程度に賑やかである。すれ違う男、女、老人、子供の視線を意識しながら、薬売りの姿を探した。

「すみません」

袖を引っ張られ、呼び止められた。男ではない。男には違いない

が、子供だった。

「あの、これ」

子供がおずおずと差し出してきたのは文のようだった。付け文か。四郎は子供に駄賃を握らせ、文を開いた。綿々とした繊細な文字で、

《満天屋にて、お待ちしています。情けをいただけるなら》
土方歳三の名前が最後に記されている。十分だ。

満天屋と赤い看板が掲げられている甘味処で、歳三は待っていた。通りすがりの（それでも、なるべく賢そうな）子供に、千葉道場の佐那子お嬢さん宛てに付け文を届けさせた。男むさい道場の中で、美少女の誉れ高い佐那子は目立つことだろう。人を間違える危険はない。

（一度、お目にはかかってみたかったんだよな）

試衛館のような弱小道場では、大流儀の千葉道場と練習試合など、夢にすら見ようがないが、その剣術小町の名は歳三も知っている。ただ、実物を見る機会はなかった。

（抱けるなら抱いてもいい。だが、本気になられても困る……小島の若様を呼び出す筈だからな）

女の扱いには自負がある。歳三に口説かれて落ちなかったのは、女色趣味のお志摩くらいのものだった。女装してくれるなら、逢ってもいいと返事をもらった時は、流石の歳三も泣くしかなかった。

（ま、昔は昔さ……）

気を取り直す意味もあって、食べかけの団子を口に入れる。口の中を工夫のない甘みが浸食していく。とてもではないが、逢い引きの用事でもなければ、来るような場所ではない。

ほう……と、綿毛のような溜め息が洩れた。どこからともなく。

空気に釣られて、そちらを見やった歳三は、その姿勢のまま硬直した。暖簾を潜って、一人の若い娘が入ってくる。目が合うと、ふわりと目を細めた。

「あなたが土方様ですの？」

美しかった。例える必要もない程に。

この前会った、兄の友人の三味線問屋の娘もなかなかの上物だとは思ったが、それでも、彼女は人間の娘だった。

「佐那子でございます」

とろけるような微笑みを浮かべ、握り拳一個分の距離を置いて、自分の隣に腰を降ろした娘は、本当に血と肉で出来た女なのだろうか。

脱がせてみたい。いや、確かめてみたい。結局は同じ意味か。

「いつぞや、道場へ菓を売りにいらした方ですわよね？」

彼女が自分を覚えていることを、歳三はそれ程不思議だとは思わなかった。この江戸で彼女と並んで釣り合うのは自分くらいのもんだ。

「弟子達が次から次へと打ち負かされるのを見た時は、目を疑いましたわ」

歳三は鼻の頭がむず痒くなった。打算や欲情抜きにして素直に持ち上げられたのは、随分久しぶりのような気がする。

「俺なりの修行なんですよ。型通りの剣術競技を極めるより、流儀それぞれの強いところを身につけた方が実戦で強いんじゃないかなって」

菓と引き替えに一手の教えを請う。道場破りと違うのはそこであり、そこしかない。今のところ、歳三と互角に立ち会えるのは、試衛館の跡取りの勇か、心形刀流の後継で伊庭の小天狗の異名を持つ八郎くらいものだ。宗次郎とはまだともに立ち会うつもりはないので、数には入れない。入らないはずだ。

「頼もしいですこと」

佐那子は気分を害したふうもなく、歳三の手を取ってきた。

「一応、『型通りの剣術競技』の師範代である私と立ち会えば、どちらが強いでしょうか」

「試してみましようか」

「ええ。もし、土方様が勝ったら、一つだけ言うことを聞いて差し上げます」

挑発するように見上げてくる瞳は、黒に近い紺だ。くつきりした目元に、ミルクのような肌はよく見ると白粉の色ではない。異国の血が混じっていると言われれば、疑問もなく納得するだろう。

ごくりと喉が鳴った。

(いい……こいつは、いいぞ)

女は跳ねっ返りの武家娘に限る。じゃじゃ馬馴らしは得意とするところだ。

二人は店を出る頃には、傍目には絵物語の一对のような完璧な「カップル」になっていた。そして、その嫌でも目につく組み合わせを「少年」が目留めたのは偶然とは言い切れない。

(……歳さん)

おつかいの帰りだった。聞き覚えのある笑い声に振り向き、それが聞き違いでないことに軽くはない落胆を覚え、宗次郎は奥歯を噛んだ。

(綺麗な人。新しい恋人かな)

兄と慕う男と並んで歩く美少女の後ろ姿から目を逸らせず、宗次郎は嘆息した。

だから、これは不幸な事故だった。

背後から伸びる手に気づけなかった。幼いながら、竹刀を取らせれば、歳三すら三本に一本は取られる宗次郎が。

どがっ!!

木刀の柄が顎にめり込み、歳三は蹲った。たった今、彼女の刀から叩き落とした木刀である。得物を手放した瞬間に、負けは決まる。一対一、剣対剣の常識だ。だが、この千葉佐那子、なかなか喧嘩のやり方を心得ている。

名前のない寺の裏、たまに浮浪者が寝床にしているこの広場は、

もう少し手入れが為されていれば逢い引きの場所にも悪くはない。

「つてえ……」

視界がぼやけた。涙目になってるらしい。

「もう降参ですの？」

佐那子はクスリと笑った。歳三に叩き落とされた木刀を蹴り上げた足が、惜しみなく裾から出ている。細い足だ。太ももをくつつけても、膝の間に隙間が出来るような。白い足、そして、白い下帯……！？

何かの間違いかと思ったが、それはよく見慣れたものだった。

今の顎への一撃とは比べものにならないショックに、歳三は目の前が真っ暗になる。

「おい」

「はい？」

事態に気づいていない佐那子、いや、佐那子の名を騙る「野郎」を白い目で睨み、歳三は無言で、はみ出た下帯を指さした。

「許されるシャレと、許されねえシャレがあるって知ってるか？」

力がみなぎっていくのが分かる。拳ってこんなに固かったかなあと思いつつ、歳三は目の前の美少女に扮した見知らぬ少年に突進した。だが、少年は軽い体さばきで避けると、歳三の手首を掴んだ。攻撃を封じ、バランスを崩す。

「色々ともう知らねえからな！」

だが、歳三は倒れない。そのまま、力ずくで少年を引き回し、地面に叩きつけた。

「くっ！？」

少年は受け身を取った。意識こそ手放さなかったが、歳三に組み伏せられてしまう。力、体重ともに敵わない。打てる手はなかった。

「……負けたら言うこと、聞くんだったよな」

「一つだけな」

「答える。どういふつもりだ。てめえ、こないだ宗次郎を尾けてた

奴だな」

少年……四郎は押し黙る。宗次郎、沖田宗次郎は妹の名だ。事情があって、男として育てられてはいる。でも、あんなに、あんなに可愛い子はいない！

（名前が割れてる。相当前から狙ってたのか）

疑心暗鬼に陥った人間は例外なく視野が狭まる。

（だんまりか。相当後ろ暗いこと企んでやがったな）

歳三が四郎の衿を掴みあげ、空いた方の手で拳を作ったその時である。

「トシ！」

門の方から、慌てた様子の男が走ってきた。岩石を削りだしたような武張った顔立ちだが、目元が柔らかいせいか、見る角度によっては幼く見える。

「勝ちゃん？」

歳三が男の名を呼んだ。注意が逸れた一瞬の隙に、四郎は歳三の手から抜け出し、駆け出した。

（仲間か！くそっ、あの強面がどれだけ弱くても、この喧嘩屋に加勢されたら、勝ち目なんかない）

素早く判断し、四郎は駆け出した。

「あ、待ちやがれ！」

歳三がすぐさま追ってくる。もはや、強面男は視界の外だ。

「待て、トシ！大変なんだべぶっ！！」

（宗次郎が帰ってこない！）

牛若丸よろしく、ひらりと飛びあがった四郎の草履の底に顔面を踏まれ、強面男はあえなく地面に沈んだ。

「悪い、勝ちゃん！今これより大変で重要なことあねえんだ」

倒れて痙攣している男の脇を走り抜け、歳三は、行き先を走る四郎に向けて眼差しを強めた。

殴ってしまったのは失敗だった。折角の愛らしい顔に傷がつい

た。程なくして直る程度のものだが、それまで待てるかと問われれば、ぼんやりと否だ。

名前のない寺の裏、たまに浮浪者が寝床にしているこの広場は、もう少し手入れが為されていけば逢い引きの場所にも悪くはない。

「坊やが悪いんだよ。大声出そうとするから」

ぐったりと動かない童の頬の痣を擦り込むように撫で、洩れたのは愉悅の溜め息。

これからゆっくり服を脱がせ、じっくりと楽しんだ後、バラバラに切り刻む。切り刻んだ体の欠片を埋めれば、綺麗な花が咲く。誰かがそう囁いたのだ。美しい世界の造り方を。

「……う……」

童の頭が動いた。剣道で鍛えた体は、いつまでも眠ってはいられない。それは間違いなく幸運のはずだった。意識さえ戻れば、少なくとも自分の意志で動くことができる。

「おや？」

はっと開いた目が、まともに自分を殴り飛ばした男のそれとぶつかった。

「待ってたんだよ。君が目を覚まして、僕を見てくれるのを」

「……………」

声が出ない、助けも呼べない。逃げようにも、腰が立たない。ただ、首がゆるゆると横に振れた。

（嫌だ。助けて、誰か……）

縛られているわけではない。立ち上がって、全力で走れば、逃げられる。猿ぐつわを噛まされてるわけでもない。声を出して、助けを呼べば、誰かが来てくれる。

しかし、本能的な部分で、それがかなわないことが分かっていた。気絶している自分を縛らなかつたのは、そうする必要がないと、男が判断したからに他ならない。逃げても、必ず追いつかれる。叫ぶうとすれば、また殴られるだろう……

（助けて、助けて……若先生、お光姉さん）

思い浮かぶ。泣いている時、困っている時、魔法のように救いの手を述べてくれた大好きな人達の顔。

「その人！」

声変わり前の少年の声に聞こえた。

「その子連れて、逃げてください！」

唐突に、無茶苦茶な唐突さで、墓石を蹴倒して現れたのは、宗次郎の予想に反して、一人の少女だった。見覚えがある。さっき、歳三さんと歩いてた娘だ。目の覚めるような美少女ぶりだが、髪も裾も乱れ放題である。

「へ？」

困惑してるのは男も同じだった。少女は宗次郎を抱き上げ、男の腕に押しつけた。

「変質者が来るんです、早く！」

「えっと……あの……」

「見つけたぞ！」

墓地の方から、また一人、若い男が現れた。それは宗次郎がよく見知った顔だった。

声を上げる間もなかった。

少女が蹴倒した墓石が飛んでくる。男が投げ飛ばしたのだ。小さな墓石とは言え、重量はあるだろうし、それに込められた祈りはそれ以上に重いだろう。単純な力学から、人としてそれどーよ的なところまで、信じがたい光景であることは間違いない。が、宗次郎は知っている。彼はそういう人だ。

「りん！」

四郎は宗次郎を抱きすくめ、地面に伏せた。その上を墓石が通り過ぎ、男の顔面に突き刺さる。無音の悲鳴があがり、男は為す術もなく倒れた。どんなに軽く見ても、鼻は折れているだろう。

「おい」

歳三が一步前に出るのと、四郎が宗次郎を抱いたまま起きあがるのは同時だった。

「歳さん！」

そして、二人の目が点になったのも同時だった。

四郎の腕をすり抜け、歳三に飛びつく宗次郎。歳三の目には、四郎は宗次郎を庇ったように見えた。いや、そうでない要素はあるか？

「あ」

二対の点目が、墓石を顔面にめりこませて倒れている男に注がれた。

「妙なもんじゃのう」

下手人捕縛の報せは瞬く間に江戸中に伝わった。尾ひれも背びれも胸びれも付いて、である。噂に疎い龍馬ですら知っている。四郎は自分からはとても言う気にはなれなかったのだが。

我が者顔と言うより、四郎の部屋のおプシヨンのような感じで、龍馬はすっかり溶け込んでいる。特な持ち味とも言える。

「おまんが男と逢い引きしてて、その痴話喧嘩にたまたま巻き込まれたんが、その下手人か。江戸も狭くなったもんぜや」

「やっぱり四郎って男の人の方が好きだったのね。うん。でも、いーんじゃない？ わたし、そういうことには結構寛容だし、あ、でも龍馬に手は出さないでね。出したら殺すからね」

佐那子はお手玉をしながら、向かいで手を叩いている少女に笑いかけた。

「ね、おてるちゃん。あなたの恋敵は男ですって」

「てるに変なこと吹き込むなよ」

四郎は子猫でも摘むように、てるを佐那子から引き離れた。冗談じゃない。てるは寂しがりで人懐こい。佐那子にだって懐くだろう。恐ろしい。

「四郎様」

大丈夫。この子は何にも分かってない。ただ、普段人気のないこの部屋に、龍馬と佐那子、賑やかな客が来たのが嬉しいのか、ずっとご機嫌だった。

「歳三様のバカ!!」

女にグーで殴られたのは、ガキの頃に、姉、のぶの着替えを覗いて以来だ。

「違うんだ、お琴! あの話は八割方は事実だが、残りの一割は全くのデタラメで」

「あなたが小島の若様と恋仲で、女装させてまでの昼日中に逢い引きして、縁結びのお寺の裏でコトに及ぼうとして抵抗されて、そのもみ合いのすったもんだで下手人を巻き込んでお縄にしたんでしょ!? 近藤さんから全部聞いたんだから!」

「ああああ……」

歳三は頭を抱えて、呻いた。勝ちゃんがあ現場を見たなら、確かにそうと見えないこともないだろう。「トシ、あの女は?」「あらあ男だ」「まあ、あのくらいの美形なら、悪くないかもな」「喧嘩だよ、ただの喧嘩だ」「珍しいな。お前もついに本気の恋をしたか」……昨日のやり取りを思い出し、歳三は憂鬱になった。誰に何をどう言えば、信じてもらえるのだろう。

窓から見上げた空はどこまでも蒼く、高く、妙に目に染みた。

笑止・迷惑・先客・万歳（前編）（前書き）

とにかく真面目なファンの方、ごめんなさい（汗）

笑止・迷惑・先客・万歳（前編）

深く降りしきる雪の中、遠ざかっていくあの方の背中をずっと見送っていた。

……「静」

今にして思えば、それが今生の別れであることを、わたしはどこかで悟っていたのかもしれない。あるいは、願っていたのだろうか。……「必ず、迎えに参る」

悲しい約束が、反故にされることを。叶ぬ愛が、安らかに眠れることを。

「お待ちしております。義経様」

ひとりごちた言葉は嘘でもあり、本音でもあった。

あの方の望む形では一緒にいられない。しかし、離れるつもりもない。

運命というものが常に望みを裏切るものならば、いつそ身をゆだねようか。わたしは知っている。本当の決定権は常に意志の力にあるのだ……

「出るのよ」

彼女の声は、いつもの勢いがない代わりに、底知れない湿った冷気を漂わせていた。

「あれだけお菓子のゴミがあれば、出てもおかしくないでしょ」

部屋の四隅に塚を築きつつある包み紙の山を示し、半眼でつけつけと言う四郎に向けて、佐那子はまなじりを陰しくした。

「うるさいわね！ あんただって食べるじゃないの」

ぽかぽかと拳をでたらめに当ててくる。確かに佐那子はよく四郎に菓子をあげたがるが、四郎から欲しかったことはない。彼女が好意を無下にされて機嫌を損ねるのがめんどくさくて、何となく食べ

てるだけだったりするが、それは言わない方が無難だろう。

「夏の夜、寝静まった頃につて言えば、決まってるでしょ？ 分からないの？」

「だからゴ……」

「あんたって、たまに大ボケだから困るわ。ねえ、龍馬」

龍馬は一人離れて、窓辺で鼻毛を抜いている。佐那子は肩をいかせて、龍馬の衿をむんずと掴み、強引に話の輪に引き込んだ。

「おお、すまん。この癖は止めろと言われちよったな」

「そーよ。あんたが鼻クソ散らかすせいで、ゴキブリが出るようになったのよ。今度出たら、退治してよね」

「……」

四郎はこっそり溜め息をつき、座りなおした。爪先が痺れている。「そういうわけだね。四郎、今日はわたしの部屋で寝てね」

「へ!？」

ぐざつと鳴ったのは四郎の首だ。だが、不思議と痛みはなかった。それより優先させるものがあったのだ。脳の、何と呼ぶかは知らないが、危険信号を司る場所が。

「冗談でしょ？ 僕、男だよ」

「やーね！ わたしは義姉さんの部屋に行くのよ。あんたはここでオバケを退治してって言ってるの。龍馬は自分の部屋で寝てよね。」

何か間違いがあるといけないから、一緒に寝るなんて許さないわよ」

「何の間違いじゃ」

頬を引きつらせながら龍馬は呻いたが、佐那子はいつもの佐那子だった。

「どうでもいいけど、何で僕なのさ」

四郎は無駄かもしれないとは思いつつも、軽くジャブを放つてみた。

「いいじゃない。友達でしょ？」

できない理由があるなら聞いてあげないでもないけど？ とばかりに、佐那子は胸を反らせた。

（龍馬が甘やかすからだよ……ったく）

四郎はげんなりと龍馬を見やった。龍馬は決まり悪そうに頭をかいている。

（一つ貸しだからな）

もつとも、これで何個目の貸しかは忘れたが。今週に入ってから。

何かがいる。

何かを感じるわけではない。ただ、わけもなく眠れない。そういう時は、大抵、何かがいるのだ。

四郎は布団に包まったまま、起き上がるでもなく、意識だけを研ぎ澄ませていた。油断さえしなければ、どんな体勢からでも必殺の一撃を放つことができる。父とすら思ったことがない自分を「創った」男から与えられたスキルは、なるほど、どんな鋭利な武器より、あるいは金や権力よりも、自分を守ってくれているとは思う。

感謝すべきなのかどうかは、分からないが。

四郎は布団を跳ね上げ、肘で反動をつけて起きあがった。

「！！」

それは突然、こちらが動いたことに驚いたのか、一瞬、ひるむ気配を見せた。十分な隙だった。

掴んだ手首は、異様なほどに冷たくて、柔らかかった。それを掴む手よりも、背筋の方が冷たくなっていく錯覚をおぼえながら、四郎はそれを布団の上に引き倒した。

（………女、の子！？）

四郎に組み伏せられて、固く目をつぶっているのは十七歳ほどの少女だった。佐那子と同じくらいだろう。彼女よりも小柄で大人しそうだ、出るところと引っ込むところのメリハリはしっかりしている。どうしてそんなことが分かったのかと言えば、少女は一糸纏わぬ全裸だったからだ。

四郎はとりあえず少女の手を放した。一見して武器は持っていないし、戦闘訓練を受けてる様子もない。

「君は？」

質問はそれだけで十分だ。四郎は布団を少女の肩にかけ、背中を向けた。少女の白い裸体が視界からなくなって、初めて鼓動が乱れてきた。

答えは返ってこない。代わりに、すすり泣く声が聞こえてきた。

無理もないとも言えるし、自業自得とも言える。間が持たないのがこそばゆくなって、四郎は箆笥を開けて、佐那子の着物を取り出し、背中を向けたまま少女の方に放った。

「お気遣い、かたじけのうございます」

ここ最近、聞かないような丁寧な言葉と、三つ指をついてのお辞儀の気配が伝わってきた。少女が着替えるのと、若気の昂ぶりが収まるのを待って、四郎はやっと少女に向き直った。

薄紫の小袖がよく似合っている。京風の顔立ちをした美しい娘だ。落ち着いて見てみれば、よく分かる。どうして分からなかったのだろう……彼女の背中に隠れている行灯が透けて見えることが。

ふらっと目の前が暗くなった。

「君は幽霊ってやつかな？ いわゆる」

「はい」

ふんわりと微笑む少女。四郎は頭を抱えて、ぐったりと膝をついた。

「静と申します。あなたをお待ち申し上げておりましたの。小島四郎様」

「僕を知ってるの？」

「あなた様にどうしてもお願い致したいことがございまして」

静は四郎の袖に手をかけた。

「わたくしに、体を貸していただけませんか？」

「は！？」

「お願いでございます！」

「ちょ、ちょっと待ってよ」

四郎は畳に尻をついたまま、後ずさった。

「君が僕に憑りつくってこと？」

他に考えようがないが。

静は何やら思いつめた顔のまま、しっかりと頷いた。どうやら、わけありのようだ。それも、とてつもなく厄介で、面倒で、それこそ一度聞いたが最後の関係者ってやつだ。

「後生でございます……四郎様」

彼女の切れ長の瞳から、大粒の涙がきらとこぼれる。四郎は困り果てた。女の涙は苦手だ。どうすればいいか分からなくなるから。

「……わけを、話してごらん」

墓穴を掘るのと似ている。違うのは、逃れようとすれば逃れようがあるということだ。しかし、そんなことはできないから、結局は同じだろうか。

「ありがとうございます！」

静は頬に涙の玉を残したまま、四郎に飛びついた。ひんやりと柔らかい腕に抱かれながら、四郎は暗澹たる思いを噛み余していた。

佐那子の部屋に泊まって以来、四郎はおかくなった。

やっぱり小島の若様はコレだったと、巷の若者は頬に手の甲を当てて、噂を交わしている。

「龍馬さん」

四郎は舞うような足運びで、龍馬に追いついてきた。うまい蕎麦屋を見つけたから、久しぶりに連れだしてやったのだが、どうも様子が違う。

爽やかな昼下がりがだった。もはや空気の一部のような江戸の町の喧騒の中を、乾いた初夏の風が踊るように吹き過ぎて行く。

「美味しゅうございました。また連れて行ってくださいませね」

「ああ」

腕を取られて、龍馬は曖昧に頷いた。

（……どうもな）

元々、四郎は普通に可愛い顔をしている。小動物のような、と言えば本人は怒るが、思わず捕まえたくなるような愛らしい空気を持っている。それが男に生まれたのは間違いなく不幸なことだった。普段、ガサツに振舞っているのはわざとではないかと思える時がある。

睫毛の下から、見上げてくる。四郎はこんなに目が大きかったのか。

(いかんちゃ……)

目が合えば、にっこり微笑む。

「なあ、四郎」

龍馬は何となく早足になるのを自覚した。どこかが妙にかゆくなってくる。

「わしゃ、ちくと寄るところがある。おまん、先に帰れや」

「お供いたします」

「野暮なこと言うな。コレじゃ」

龍馬は小指を立ててみせた。四郎がむっと口を噛みしめる。

「そうでございますか。それでは」

くるりとそっぽを向くと、鬚が子犬の尻尾のようにぴょんと跳ねた。

ツンケンと遠ざかっていく四郎の背中を見送りながら、龍馬はまだどこかがむず痒くて落ち着かなかった。

「もしかして、わしがおらんと却って悪い男に引っかけられたりして、危ないんかの」

四郎の戦闘能力は忘却の彼方である。

「ぎゃーっはっはっは！！ どひーっひっひっひー！！」

あまりにも予想通りの反応だった。龍馬の話を聞いた歳三は腹を抱えてのた打ち回っている。

龍馬が足を運んだのは、いもしない女のところではなく、試衛館だった。時折、道場の方から掛け声が聞こえてくる。道場主の勇は

弟子の鍛錬で今はいないが、暇そうな師範代が龍馬の相手になっていた。

「笑い事じゃないぜよ。土方。冗談だと思うなら、いっぺん会てみいゃ」

「けっ、何が嬉しくてわざわざオカマなんざ拝まにゃならねーんだ」
「ありゃ四郎じゃないぜよ。物の怪が憑りついたんじゃ」

「オカマの物の怪か。こいつぁ傑作だ。ざましろ」

歳三はにちゃにちゃと噛んでいた草をぺっと吐き出した。その時である。

《お邪魔します》

龍馬と歳三の間に、によきつと男の首が生えてきた。

べしゃ！とその頭を、出る釘でも叩くように押し潰したのは歳三の手だ。

「そうだ。こないだお光さんからスイカ貰ったんだ。食うだろ？」

「待て、おい土方！ おまん、今、今……」

腰を抜かした格好で、龍馬は歳三の手を指差した。畳の上についたままの手を。

「ああ。夏はどうしても出るんだよ。どんだけ念入りに掃除しても出やがるんだ。こればかりは慣れだな」

「誰がゴキブリの話をしちよるか！ おまんが今叩き潰したのは人の頭じゃ！」

悲鳴じみた声をあげる龍馬。歳三はその手を畳から離す。ゴキブリはいない。

「なに錯乱してやがる。土佐もんが、たかだか油虫くらいで」

歳三はその手で龍馬の額に触れた。無音の悲鳴が上がり、龍馬はそのまま卒倒した。歳三はわけが分からず、龍馬の頬を軽く叩いてみたが白目を剥いただけで、反応はない。

「ひどいではないか。誰がゴキブリだ」

今度は天井から頭が生えてきた。

「おい！ 坂本、しっかりしろ。ったく、土佐者のくせに暑氣当た

りとは情けねえ」

歳三は龍馬を仰向けに寝かせた。そこでタイミングよく障子が開き、宗次郎が入ってくる。茶と菓子に乗せた盆を持っている。

「あれ？ 坂本さん、どうかされたんですか」

「暑氣当たりだ。宗次、菓子はお前にやる。悪いが、俺の薬箱、持つてきてくれるか」

「石田散薬って、暑氣当りに効くんですか？」

「効くと思えば何にでも効くんだよ」

「ちょっと待て！」

すたん！と、天井から一人の男が着地してきた。白の水干に、白の元結。少年少年した面差しだが、二十歳の歳三より年長ということはなさそうだ。

「怪談の最中に普通に日常に戻る奴がいるか！」

男はあまり迫力のない顔で怒鳴る。それでも、子供の宗次郎はびくついたらしく、歳三の腰に掴まってきた。

「歳さん、あれ」

「ん？ 俺には何も見えんし、聞こえんが」

「後ろが透けて見えます」

「よし、お前も薬を飲め。幻覚にも効くはずだから」

「無視するな！」

宗次郎の肩を抱いて踵を返す歳三の前に回りこみ、男の幽霊は拳を振り上げた。

「……つとーしいんだよ」

歳三はぼりぼりと首の後ろをかきながら、ようやくと、めんどくさそうに幽霊と目を合わせた。

「俺あ別に崇られるようなこたあしてねえぞ。崇るような氣力があるんなら、生きてるうちにするもんだ。死んでからぐだぐだぬかすようなカマ野郎なんぞ、どーせ生きてたところでロクなもんじゃねえ。とっとと成仏しちまいな」

「崇って来たわけではない。頼みがあるのだ」

男は突然、がばっと土下座してきた。

「人を捜すのを手伝ってほしい。私の大切なおなごじゃ」

「それも幽霊なのか」

「左様」

答えは決まっている。厄介事はごめんだ。どう突っぱねてやろうかと思案しているうちに、宗次郎が口を挟んできた。

「助けてあげましょうよ。歳さん、どうせヒマなんですよ？」

「宗次、あのな」

「歳さんだって、わたしが突然いなくなったら、探してくれますよね」

「……」

いつかの祭りで迷子になった宗次郎を探して走り回ったことがある。あの時、心底焦ったことを思い出して、歳三は苦笑した。人混みの中を探して、探して、やっと見つけた。宗次郎は自分を見つけると、泣きながら駆け寄ってきた。下駄が片方脱げた。その時に感じた何とも言えない、胸の奥が温かくなるようなくすぐったさは忘れられない。

「ありがとう、坊や！」

男は顔を上げて、宗次郎を抱き締めた。

「申し遅れた。私は源九郎義経。坊やは牛若丸とでも呼んでくれ」

「牛若丸！」

宗次郎の目がぱつと輝いた。

「あなた、牛若丸ですか？ 弁慶は？」

「弁慶達はまだ成仏したよ。この世にそれほど強い未練がなかったのだろう」

「で、お前は」

歳三は宗次郎を義経の腕から引っこ抜くようにして、言った。

「その大切なおなごとやらを見つけ出すまで成仏できねえってわけか」

「左様だ。吉野山で別れて、平泉で死んでから、ずっと彼女を待つ

ていたのだが、彼女もどうやら私を探して迷ってしまったらしくてな」

「分かった」

歳三は義経の話を遮り、頷いた。

「大分近くにいるぜ。こういう偶然ってのはねえもんだ」

未だに目を覚まさない龍馬の世話は宗次郎に任せ、歳三は義経を連れて試衛館を出た。

「義経様！」

感極まった声をあげ、彼の体を借りた彼女は義経の胸に飛び込んだ。

傍で見れば、かなり異様な光景である。

赤坂の小島屋敷……四郎の実家である。残酷な運命によって引き裂かれた恋人達は、数百年の年月を隔て、ようやく巡り会えたのだ。その美観の善し悪しはともかく、巡り会えた事実には変わりはない。

「お会いしとうございました……殿、義経様……」

その呟きが四郎の口を借りて、彼の声で出てくるのが、何ともはや。色恋の機微を理解する男・歳三はとりあえず笑うのだけは我慢した。

「良かったな。さあ、仲良く成仏しちまいな」

「ええ……」

四郎の体を借りた静は一旦、義経から身を離し、歳三に深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。これでやっと成仏できます」

「いいってことよ。生まれ変わっても仲良くな」

たまにはこういうのも悪くない。お伽噺など、はなから馬鹿にしている歳三だし、人からこのような話を聞かされれば、やはり鼻で笑うだろうが、それでも、悪くはなかった。

「つきまして、土方殿」

義経がいつの間にか歳三の後ろに回って、肩に手をかけてきている。

「あなたの体を私にお貸しくありませんか。その、静がね……」
四郎の目もじもじと歳三と義経を交互に見ている。ほんのりと頬を染めた小さな顔。やはり、どこか宗次郎に似ているような。

「お願いいたします。土方様」

四郎の手が歳三の胸に触れた。

「幽霊同士では、どうしてもちゃんと触れ合えません。だから……」

暗転。そして、前言撤回。

「わたくし、成仏する前に、一度だけ義経様と接吻がしたいんです。生身の体で」

鬼でも魔でも構わない。

歳三は祈った。祈るしかなかった。

誰でもいいから助けてくれ……

） 後編へ続く！ （

笑止・迷惑・先客・万歳（後編）

歳三は逃げた。逃げるしかなかった。

「何ゆえお逃げになるのでございますか、土方様」

バンビのような足。見た目からは想定しがたい持久力でもって、歳三を追いかけるのは一人の少年。満面の笑顔よりも憂いの表情がよく似合う。そんな少年だ。今もその目にきらりと光る涙は、十分に武器として通じることは否定しない……だが、当事者が自分となれば全く話は別である。

「何が、嬉しくて……」

ぎりぎり痛みを訴える脇腹から、歳三は渾身の思いのたけを叫んだ。

「野郎なんぞと接吻せにやらんのじゃあああああああ!!」

「わたくしは野郎ではありませんわ!」

少年、四郎の体に憑りついた幽霊少女、静は心外とばかりに反駁する。

「俺にとっては同じだ! ンなことより、てめえ! そんなに今際の別れをしたかったら、せめて俺と釣り合うくらいの女にいたらどうなんだ」

「嫌でございます! 義経様がわたくし以外のおなごに触れるなど」
「……」

女の「だって嫌なんだもん」の前に男はどこまでも無力だ。新たに生まれた人生哲学は、この先、役に立つとは思えない。

「ところで、義経の方はどこに行きやがった?」

ふと、気がつけば、義経の方がいない。

「呼んだか?」

声に釣られて脇を見ると、えらく顔色の悪い町人風の男が走っている。

「お前、義経か?」

「左様」

紫色の額をこくりと下げ、義経は微笑んだ。その目からぼたりと丸いものが落ちる。

「……」

「土方殿がどうしても嫌だと言うから、やむなくその辺りの者に頼んで回ったのだが」

どうしようもなく黒い予感を振り払えず、歳三は頭を抱えた。

「嫌なら無理強いはせぬと。そして、否と言わなかったのは白木の棺桶で寝ていた両替屋の勘吉殿というわけだ」

ほんのりと線香のにおいを漂わせ、普通に告げた。

「返してこおおおおい!!」

歳三の踵が義経の後頭部にめり込んだ。

「そいつの葬式が始まる前に！ 手遅れかもしれねえけど！」

地面に沈んだ義経を飛び越え、歳三はひたすらに走った。神に仏に、今まで弄んだ女達に、どつき倒してきた男達に、ひたすら祈りまくりながら。

町を抜け、山を越え、いつしか海岸線を爆走している。この辺りまで来れば、多少派手に暴れても人民に害は及ぶまい。

瞬間、重力から解放され、何も聞こえなくなった。

（!?!）

おや、と思った時には、歳三の体はもみくちゃになりながら地面を転がっていた。

（何が起きた……?）

鼓膜が激しく波打ち、ひどい耳鳴りがしている。

歳三は起き上がると、辺りをぐるりと見回した。離れたところに四郎の体が倒れている。だが、それよりもまず目を引いたのは、海の向こう……三十間はあるかという巨大な黒船が四隻、鎮座している。

（何だありゃ!?!）

黒船の砲門から立ち昇る灰色の煙が、夏の空に吸い込まれていく。

ようやく事態を把握できた。自分達は砲撃の余波を浴びたのだ。

「う……」

むっくりと四郎が身を起こした。歳三はとっさに身を引いたが、四郎の目を見て、はっと留まる。先ほど自分を追っていた時のようなとろんとした眼差しではない。少し動揺してるようだが、いつもの歳三が知っている、勝気さと頼りなさを同居させた四郎の目だ。

「小島四郎！」

「な、何？」

寝起きのような声で返事をする四郎を抱え上げ、

「逃げるぞ!!」

歳三は砂煙を上げて駆け出した。四郎は歳三の腕の中でV字バランスのような格好になりながら、目を白黒させている。

（さっきの衝撃で、静が放り出されたんだな。今のうちに、ずらかる!）

また静が現れたら、どうにか説いて、女に……そうだ、お琴がいいだろう。だめだったら宗次郎だ……憑りついてもらって、自分は義経に体を貸す。それで八方丸く収まるなら。

「待って。ちょっと、土方さん」

「何だ。お前、今がどんだけ切実な状況か分かってねえとは言わせねえぞ」

「静がここを離れるなって」

「は？」

「彼女、今の砲撃で驚いて引っ込んじゃったんだ。まだ、僕の中にいる」

抱えていた荷物の中身は時限爆弾だった。だとすれば、それを放り出したとしても、一応緊急避難ということで罪には問われない。もっとも、今は江戸時代。そんな庶民に優しい法律はない。

歳三は前も後もなく、四郎を放り投げたが、四郎は猫のように体をひねって着地した。

「あれ」

四郎は沖の黒船艦隊を指した。

「静が言ってた艦の特徴と合致する。とすれば、そろそろ来る頃だ」
「あん？」

完全に置いていかれた歳三は不愉快気に眉をしかめた。
その時である。

ざばあ！と、水を切る音がした。

「こっち」

四郎は歳三の腕を取り、近くの岩場に引きずり込んだ。

「何だってんだよ、いきなり……」

「しっ！」

腕を組むような格好で身を潜めながら、海の方を見ると、何と黒スーツの一団が海面から這い出してくるところだった。体の線をびったり覆う黒スーツにゴーグル、酸素ボンベ。後に四郎に説明されて彼らが人間だと分かったが、歳三はこの時、彼らを海坊主と信じて疑わなかった。

『思ったより楽だったな』

海坊主の一人が海坊主語で喋る。男の声だ。

『所詮、東洋のサル山さ。総督は慎重過ぎるんだよ。一発ドカンとおみまいしてやれば、震えあがって、言うがままになる』

何を言ってるのかさっぱり分からない。歳三は横目で四郎を見た。
『小心で働き者で従順だっていうから、奴隷にはおあつらえむきだ』
絡めていた腕は既に解かれ、握り拳が固められている。

海坊主語は分からなくとも、何やら嘲笑めいたものを歳三も感じる。

『おい、お喋りはその辺にしとけ。爆弾、湿らせてないだろうな』
四郎の目元がぴくりと動いた。

『大丈夫ですよ。これを』

背中に箱のようなものを背負っている海坊主が、リーダーらしき海坊主に背中を向けて、箱を親指で示した。

『適当に仕掛けて回ればいいんでしょ？』

『そうだ。だが、武家は避ける。平民の家を狙え。サムライを敵に回せば面倒だからな』

『サムライ?』

『ナイトだ。だが、死を恐れず、恩も恨みも決して忘れない、恐ろしい連中だよ』

四郎が歳三の袖を引っ張った。

(何だよ?)

(何人までさばける?)

(妖怪は相手にしたことねえな。それより、お前、海坊主の言葉なんか分かるのか)

(あいつらは江戸に火を放つ相談をしてるんだ! 自信がないなら、ひとつ走り番所にこのことを報せてきて)

(ガキの分際で偉そうに大人に指図してんじゃねえよ。いいぜ。お前が余した奴はみんな俺が引き受けてやる)

(それでこそ喧嘩屋だよ)

商売にしたつもりはない。俺は喧嘩師だ。かくて、戦いの火蓋は切って落とされた。

そして、戦いの幕はあっさりと降ろされた。

「なあ、四郎」

ぼこべこになった海坊主を縄でひっくりくりながら、歳三はふと思いついたことを口にした。

「あの幽霊女、俺達を担ぎやがったのか?」

今にして考えれば、黒船の斥候の危険を察知した(何せ彼女は壁抜け・高速飛行お手のもの幽霊だ) 静が誰か戦える人間をここまでおびき寄せる為に仕組んだと思えない。

「俺達っていうか、俺だね」

手馴れた様子で爆弾を解体しながら、四郎は答えた。

「どういう意味だ!」

「言ったのは僕じゃないよ。静が『四郎様の思いつく限り、暇を持て余した凶暴で後腐れのない、社会の慈悲で辛うじて永らえてらっしゃり、万が一のことがあってもなるたけ悲しまれないような方をお連れくださいませ』って」

「てめえ! それ、作ってるよな!? 絶対作ったよな!」

「誰も土方さんのことだって言っていないでしょ? 嫌だな。年を取ると被害妄想が強くなっちゃって」

「このガキヤ!」

殴りかかってくる歳三の拳をいなしながら、四郎は物思いにとらわれていた。

(この国はどうなるんだろう)

静が危険を報せてくれなかったら、どうなっていたか。

連中の書いたシナリオはこうだ。黒船の砲撃に驚いた付近の住人が浜に集まってくる。空になった町に爆弾をしかける。かくて、大混乱……何が何だか分からないうちに、異国人達が乗り込んでくる。

四郎はこの国が好きだ。静かで平和で、優しい人々が助け合いながら暮らしている。

(どうすれば、守れるんだろう)

たかだか脾腹を一突きする程度の芸しか持っていない自分が出来ることは何だ?

町の方からばらばらと人々が駆けつけてくる。黒船の砲撃に驚いたのだろう。その顔は一樣に魂を抜かれたような呆然としたものだ。中には無邪気に歓声をあげている者もいる。それを平和ボケと嗤うほど、傲慢ではない。

三日後、黒船を率いてきたペリー総督が老中に国書を渡したらしいと、四郎は父から聞かされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4203a/>

幕末血風帳

2010年10月14日14時20分発行